敬みて立山の賦に和ふる一首　并せて二絶

四〇〇三番

朝日さし　そがひに見ゆる　神ながら　み名に帯ばせる　白雲の　千重を押し別け　天そそり　高き立山　冬夏と　別くこともなく　白たへに　雪は降り置きて　古ゆ　あり来にければ　こごしかも　岩の神さび　たまきはる　幾代経にけむ　立ちて居て　見れども異し　嶺高み　谷を深みと　落ち激つ　清き河内に　朝去らず　霧立ち渡り　夕されば　雲居たなびき　雲居なす　心もしの　に　立つ霧の　思ひ過ぐさず　行く水の　音もさやけく　万代に　言ひ継ぎ行かむ　川し絶えずは

四〇〇四番

立山に　降り置ける雪の　常夏に　消ずて渡るは　神ながらとそ

四〇〇五番

落ち激つ　片貝川の　絶えぬごと　今見る人も　止まず通はむ